

ご縁の道に咲く花



ヤブコウジ科の常緑小低木。白もしくは淡いピンク色の花を咲かせ、冬には赤い実をつけます。
開花時期：5月～6月



ナデシコ科の多年草。花の形が歌舞伎役者の松本幸四郎の紋所に似ていることがこの名前の由来とされています。
開花時期：6月



ユキノシタ科の落葉低木。1950年代に発見されるまでは「幻のアジサイ」と呼ばれていました。
開花時期：6月



クマツヅラ科の落葉低木。淡紫色の花を咲かせ、秋には房状に美しい紫の果実をつけます。
開花時期：6月



シソ科の多年草。花の咲き方が「泡立つ波」を連想させることがこの名前の由来とされています。
開花時期：5月～6月



ヒガンバナ科の多年草。球根性の植物で、秋の初めころ茎をのぼし、赤い放射状の花を咲かせます。
開花時期：9月～10月



リンドウ科の多年草。この「ご縁の道」には赤と青、2種類のリンドウが花を咲かせます。
開花時期：10月～11月



キク科の多年草。一般的な野菊です。生育範囲が広く、日本のあちこちで出会うことができます。
開花時期：8月～11月



ご縁の道 ハート形の石

赤の道の終点には、ハートを模した石が配されています。これは、人生を迷いながらも懸命に歩んだからこそ感じることができるといえる熱い心を表現しています。ぜひ探して、その思いを感じてください。

「ご縁」とは、仏教の基本的な考え方「縁起」の法で、すべての事柄は色々な因縁によって成り立っている。言い換えれば、それぞれが様々な条件によって変化し単独で存在するのではなく、相互に依存し合っていることを言い、偶然とかたまたまとかいう言葉は、仏教的な考え方では必然であり因によるものである。

ご縁を大切に。

2012年4月、浄土宗大本山くろ谷金戒光明寺では、元祖法然上人の800年大遠忌が奉修されました。この「紫雲の庭」は、その記念として作庭された庭です。

2012年6月、「紫雲の庭」の北端に新たな庭の一部を設えることになりました。ここでは、元祖法然上人も「ご縁」を大切に想う方であったことから、「ご縁の道」を設えました。人と人の絆が見直されている昨今、「ご縁」の尊さに想いを馳せていただければ幸いです。

また、この「ご縁の道」は、NHKのTV番組「仕事ハッケン伝」の中で、麒麟・川島明さんが構想を練られ、庭造りに挑戦された場所でもあります。

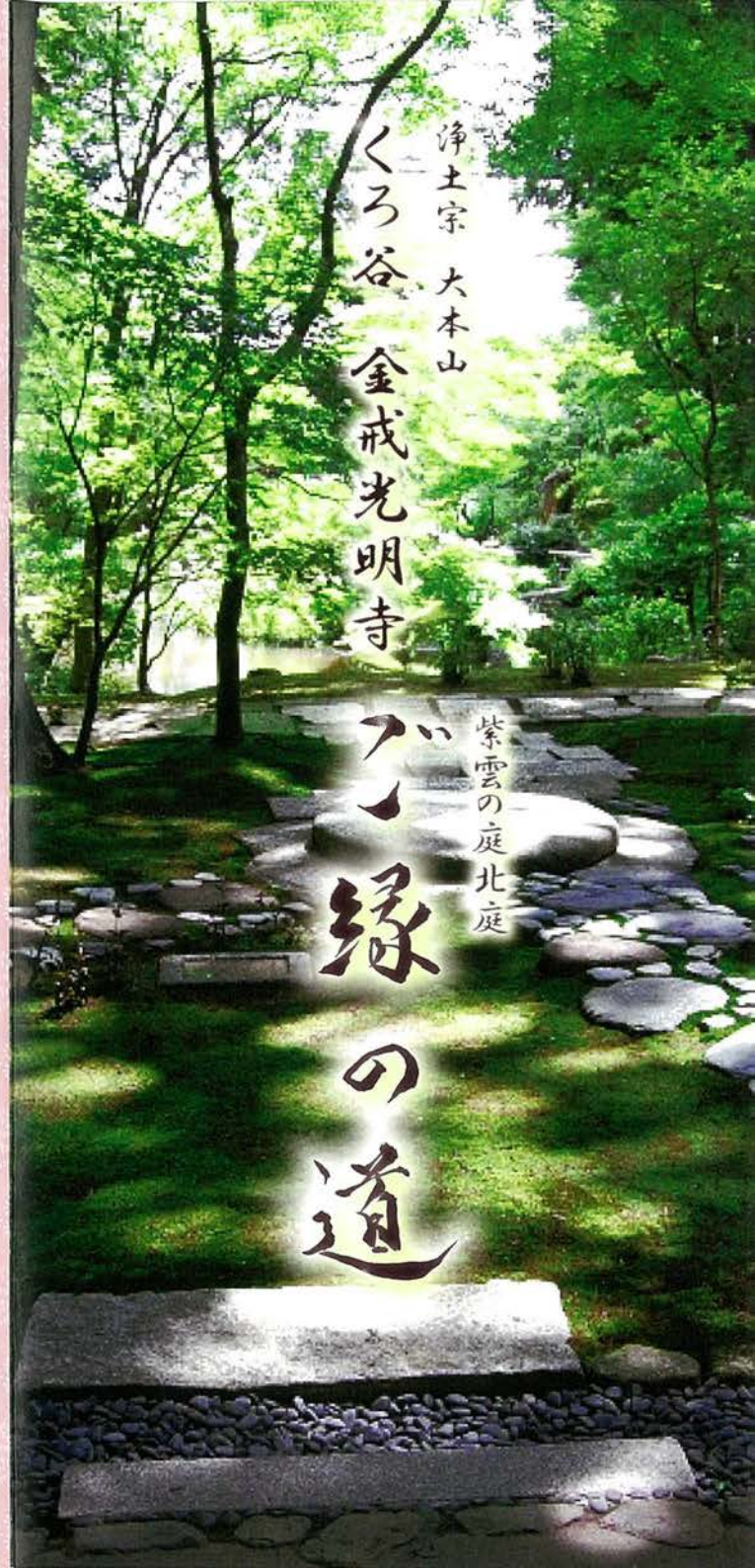
浄土宗 大本山 くろ谷 金戒光明寺

〒606-8331 京都市左京区黒谷町121
TEL: 075-771-2204 FAX: 075-771-0836
<http://www.kurodani.jp>



<交通機関>
◆JR京都駅より、京都市バス「岡崎道」又は「岡崎神社前」下車
◆京阪電車「神宮丸太町」駅下車

作庭：植彌加藤造園株式会社
〒606-8425 京都市左京区鹿ヶ谷西寺ノ前町18
TEL: 075-771-3052 FAX: 075-752-0154
<http://www.ueyakato.co.jp>



浄土宗 大本山
くろ谷 金戒光明寺

紫雲の庭北庭
ご縁の道

視点場

「視点場」とは、この庭を眺めるときの一番のビューポイントを意味します。視点場から庭を臨むと、様々な石に目が留まるでしょう。これらの石には色々な意味を見出すことができ、様々な解釈で庭を楽しむことができます。

見方① 法然上人開宗の時



浄土宗を開いた法然上人は、開宗の時、善導大師が著した「観経疏」に導かれたといわれています。ここでは向かって左の石を法然上人に、右の石を善導大師に見立てています。

見方② 三尊石組



三尊石組とは、日本庭園の代表的な意匠の一つです。ここでは、道の左にある石を勢至菩薩（座像）、右にある石を観音菩薩（立像）、奥にある石を阿弥陀如来に見立て、三尊石組としています。

見方③ 相撲



中央にある大きな石（伽藍石）を土俵に、道の左右に配されている石を力士に見立てています。向かって左の石は力士が構えている様を、右の石は土俵に入ろうとしている力士を表現しています。

見方④ あなた次第



庭を見る時は様々な見方がありますが、一番の見方として正解というものはありません。庭に対峙し、心の赴くままに感じ、見ることで、その庭が庭として生きてくることでしょう。

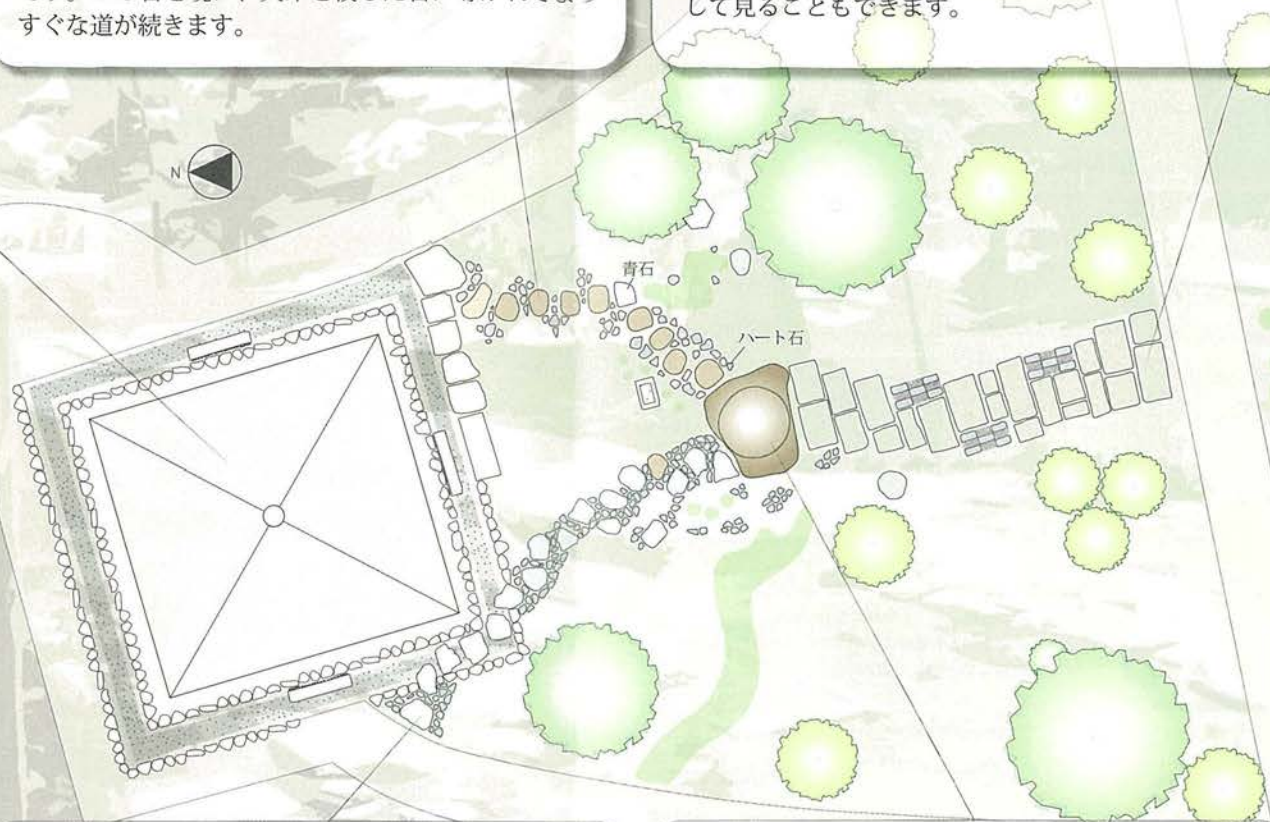
赤の道

この赤の道は、ある人の人生を表しています。道の前半部は、人として歩み始め、迷い、悩み、苦しみながら人生の意味を見いだすために歩いていく道を「渦」をイメージしながら石（鞍馬石）を配し、表現しています。道の後半部は、進むべき方向を見出し歩いていく道です。その起点となるのが道の途中にある青い石です。この石を境に、矢印を模した石に導かれてまっすぐな道が続きます。

紫雲 共に歩む道

この道は、赤の道、青の道のそれぞれを歩んできた2人が力を合わせて進んでいく道です。赤い色と青い色を混ぜると紫色になりますが、この道では赤と青の石を市松模様に配することで紫を表わし、重なり合う2人の道を表現しています。

また、この道を紫雲に見立て、御影堂に続く道として見ることもできます。



青の道

この青の道は、ある人の人生を表しています。道の前半部は、危ういところがありながらも進んでいく道を飛び石（鳴門石）を配することで表現しています。道の後半部に進むにつれ、過去の様々な経験があったからこそできる盤石な道が続きます。道の終わりでは、過去を確かめながら、これから進むべき道を模索しているのでしょうか。振り返るかのようには石が配されています。

出会うの石

この大きな石は、「伽藍石」といい、元々、木造建築の礎石として使用されていた石です。ここでは、赤の道と青の道が交わる場所であることから、「出会うの石」として意味付けています。赤の道、青の道、それぞれを歩み、ここで出合いを果たした二人は、一人の時よりも大きな力を得て、さらなる高みへ上るために新たな道を歩いていくことになります。